

日本の公文書としての外邦図

外邦図の研究は、終戦時に参謀本部から資源科学研究所に運び込まれて以後の整理の開始を起点とすれば、1953年頃から始まっていた。以後『国外地図目録』の作製や国立国会図書館での目録の整備があるが、『測量・地図百年史』の刊行（1970年）後、清水靖夫氏の台湾・樺太・朝鮮半島の地図作製に関するパイオニア的研究が登場するのが1980年代、さらに長岡正利氏による外邦図の一覧図の紹介が1990年代の前半と、ゆっくり展開した。出版社によるリプリントの刊行、さらに戦前・戦中期の関係文献の復刊もこれに並行して進んだ。巨大組織であった日本陸海軍や植民地政府が長期間にわたって作製した地図・海図は膨大で、初期は「俯瞰的に」これを展望することなどほとんどできなかったのである。

ただし、初期に整理に当たった故浅井辰郎氏（1914-2006年）の文章を見ると、外邦図に対する関心は学界だけでなく登山家の間にもあり、1960年に薬師義美氏は浅井氏を訪ねて、ヒマラヤの25万分の1図を入手している（『外邦図研究ニューズレター』7〔2010年〕、のち薬師氏の著書『ヒマラヤは黒部から』2017年刊に収録）。もちろんこの図はインド測量局製の図を複製した外邦図（昭和17年陸地測量部製）である。同氏の回想では、1958年にすでにこのヒマラヤの外邦図が一部複製されて登山家のあいだに出回っていたという。当時ヒマラヤは探検と登山の時代であり、外邦図は貴重な情報源と評価された。

私たちはこれまで学術的利用を念頭に作業してきたが、外邦図には他にもさまざまな用途がある。外邦図の高精細画像を「外邦図デジタルアーカイブ」を通じて発信している東北大学には海外の放送局の取材のほか、近年は毎年8月の終戦記念番組のための取材要請もあるという（『外邦図研究ニューズレター』11号、本号掲載の関根報告）。東北大学は早くから詳細な外邦図目録を学術用に作成しており、この種の要請に即座に応じられる。思い起こすと2016年には筆者にもNational Geographicの取材があり、それによるネットの記事は日本語版もでている（「米国で見つかった日本の軍事機密「地図」14点」）。

このように外邦図がひろく認知されていくのは望ましいことである。しかし、そのためのサービスが大学の研究室の本来の業務にさしつかえることが懸念された。これを解決するには、外邦図デジタルアーカイブの公開している画像の他の機関への移転、さらにはそこからの公開が望ましいと考え、2014年1月から近代アジア史関係文書をネットで公開している「アジア歴史資料センター」に外邦図デジタルアーカイブの仕組みや役割の説明を開始し、同年12月からはその母体機関、国立公文書館との協議を開始した。おりから同館では、その機能拡充を協議中であったが、その方針をうけて外邦図画像が同館に移転され、さらに2018年11月から同館内のパソコンを通じて来館者へ公開されるに至った（本号「本研究開始までの経過」参照）。今後はネットを通じた公開へ拡充が期待されるが、それまでの間、東北大学の外邦図デジタルアーカイブのサービスは維持していただきたい。

他方、この国立公文書館での画像公開は、外邦図が日本の公文書として取り扱われるようになったことを示している。謎の多い、「負の遺産」ともいわれた外邦図は、日本の陸海軍ならびに植民地政府の作製したものであり、本来公文書としての性格を持っていた。社会の公共財産となった外邦図の用途を、さらに考えていきたい。（小林茂）